

---

# 僕と女神と木蓮と

月桃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と女神と木蓮と

### 【Nコード】

N52720

### 【作者名】

月桃

### 【あらすじ】

黒い髪と青い瞳の高貴なる姫君。

白い花の似合う君に、僕は・・・、恋をした。

王都エル・セル・ラルトの現市長の息子。シュベルツ・イル・マセルティは、今日も幸せだった。

## 前編

黒い髪と青い瞳の高貴なる姫君。

白い花の似合う君に、僕は・・・、恋をした。

この地上から、女神の加護が消えて久しいと嘆かれています、今日この頃。しかし、彼女こそは女神の加護を受けた稀有なる聖女。いや、女神の化身と言っても過言ではない。

「ごきげんよう、シュベルツさま。いいお天気ですね。」

澄んだ鈴の音のような声。可憐な話し方は、そう女神様だ。

いつも決まった曜日はこの時間帯、この教会に来る彼女は、今日も変わらぬ華のような笑顔を浮かべている。紺色のシンプルなワンピースドレスに、総レースの黒い日傘。クリーム色のシヨールを羽織っている。ドレスの紺色が肌の白さを強調させて、華奢で可憐な彼女を一層、際立たせているようだ。

「お、お久しぶりでございます。ご、ごきげん、うるわしゆ、く・・・」

ルティアさまに、おかれましては、今日も、その、お、お美しく・・・」

くすんだ金髪と茶色い瞳をした、小奇麗に着込んだ貴族の装いにしては、しかし、いまひとつ冴えない青年は、俯きながら、天にも舞い上がる思いで、たどたどしく挨拶を交わした。ルティアよりも5歳も年上というのに、なんと情けないことこの上ない。

「ルティアさまー。来てくれたのー。」

「ルティアさまだー。」

「こんにちわー、ルティアさま。」

教会に併設された学校から、帰りがけの子供たちが出てくる。

「まあ、こんにちは。みんな、元気いっぱいね。」

日傘を畳んだ彼女は、子供たちと視線を合わせるために、腰をかがめた。彼女にじゃれつく子供たちは元気いっぱい、それぞれルティアの手を引っ張り、ぴよんぴよん飛んで、うれしい様子を伝えている。

ああ、なんて美しいんだ。

シュベルツは、その光景を見るだけで感無量といった様子で、ぐつと拳に力を入れた。

「もしお時間があるなら、シュベルツさまも一緒に、……。」

子供たちと過ごしませんかと、問いたかったのだが……。

「……。」

小気味良い音と同時に、ルティアの真横にシュベルツが倒れた。

ルティアは、子供に合わせて腰をかがめていた。そのために、上目遣いにシュベルツへ話しかけてしまったのだ。それがいけなかった。そして、青い瞳を直視してしまったシュベルツは、緊張と興奮、歓喜のあまり、足元がもつれて、地面へと一直線に落ちてしまったのだ。

顔面から、きれいに。

「きゃつ。シュベルツ様!!!」

大変!!!大丈夫ですか?あ、あの、お怪我はございませんか?」

「あの、今、お手を……。」

ルティアは、あわててシュベルツを起こそうと手を掛けようとした。

「しゅべるつさま、大丈夫?」

慌てるルティアに対して、子供たちは以外にも冷静だった。

それもそのはず、シュベルツが倒れた原因は、小さな子供たちですら、なんとなく分かっているのだから。

結局、ルティアより早く、子供たちが4人掛りで手を取り、シュベルツをいち早く起こしにかかった。

と、馬が全速力で近づいてくる、蹄の音がしたかと思うと、目の前に突如、王子様が現れた。

「ルティア、また、1人で外出したのか?1人で出かけてはいけないと、あれほど言っただろう?」

馬の鳴き声とともに、馬上より声が聞こえた。

「お兄様、……。」

ルティアは驚き、瞳を見開いた。そして、いたずらが見つかった様な、笑み。

「おいで、ルティア。」

馬上より金髪青眼の兄が、ルティアに手を差し伸べ、声を掛ける。

さながら、お姫様を迎えに来た、王子様の様に。甘い笑顔で。

それに答えて、手を差し出そうとしたルティアは、傍として我に返った。

「あつ、シュベルツ様。」

麗しい黒髪が翻り、ルティアが後ろを向くと、鼻を押さえながら立つシュベルツが居た。その姿を見てほっとしたのは、束の間。次の瞬間、ルティアの身体はふわりと浮いて、馬上の兄の腕の中に抱えられていたのであった。  
手にしていた日傘は、地面へ落ちた。

「お兄さま。あの、シュベルツ様が、お怪我を。」

「ルティア、ルティアは、私の言うことを聞いてくれなかっただろ  
う？」

「だから、私もルティアの言うことは聞けないよ。」

王子様は、一瞬にして笑顔から不機嫌顔に早変わりした。

「あつ、あの、でも、ちゃんとみんなに言ってきましたのよ。黙って、出たりはしていませんわ。」

ルティアは、焦ったように、眼をそらしながら釈明した。が、しかし、それは言い訳していると言っているようなものだ。

「ああ、私がいいと言ったと、皆に言って出てきただろ？」

確かに、教会と学校への外出は許可した。しかし、護衛つきの事件でのことだっただろ？ 残念だが、1人で出歩いて良いと言った覚えはない。」

返す言葉もない。ルティアは、俯いて、そして兄の腰に手を回し、ぎゅっと抱きついた。

「……、ごめんなさい。」

ルティアは、消え入るような声で、謝罪した。

「我が妹が邪魔をした。失礼する。」

手綱を裁きながら、シュベルツを一瞥すると、颯爽と馬を操り駆けて行った。そして去り際に、氷の貴公子と呼ぶにふさわしい、眼光を放ち、シュベルツ以下子供たちは、凍った。

「……、さすがは、氷の貴公子。」

氷の貴公子とは、ルティアの兄、ラディシルの異名である。

シュベルツも貴族の端くれであり、父親は王都エル・セル・ラルトの現市長である。しかし、四大公家の一つであるカミュール家には、遠く及ばず。家柄、政治的地位、財力とどれをとっても格の違いは明らかであった。

「……、ああつ。女神様。今日も、お美しくいらっしやった。名前を呼んでいただけだけで、お声を掛けていただけだけで、僕は、もう、死んでもいいっつー!!」

拳を握り、天を仰ぐその姿を、子供たちは遠い目で見守った。

「い、いけない。女神様に、ルティアさまに、花を渡しそびれてしまった。新しく、届けなおさねば。」

ぐちゃぐちゃに、自分の下敷きになったしまった憐れな白い花を見てシュベルツは、我に返った。今日は女神様に木蓮の花を渡しそびれたと。

「ねえ、シュベルツさま、これ、僕らが貰っていいのかな。」

少年長の子供が、ルティアの置いていった籠の中身を指して言った。菓子と絵本が数個入っている。

「ねえねえ、お菓子食べていい?」

「シュベルツさま、絵本読んで!。」

小さい子供たちは、シュベルツの手を引き、それぞれ問う。毎週、ルティアは、お菓子や絵本を持って、教会や学校へ来てくれる。籠の中身は、子供たちへのプレゼントに間違いは、ないだろう。

「ああ、ルティア様に、お礼の手紙を書くんだぞ。」

そうだ、そして、日傘と籠と届けながら、花を贈ろう。もちろん、今が時期で、彼女が一番好きと言っていた木蓮の花と一緒に。きつと、喜ばれるに違いない。そう思い立つと、こうしては居られない。シュベルツは、通りの花屋に走っていった。

「ああなんて、素敵な日なんだろう。女神様に会って、己の心を心配してもらい、そして、花を贈れるのだから。」

スキップしながら、花屋へ急ぐ、エル・セル・ラルト現市長の息子。

その理由は、言わずもがな、花屋の女将は、事情を知っていた。女将もルティアの信者の1人である。

「今日は、木蓮を多く仕入れていて良かったよ。」  
木蓮を買った、市長の息子を見送りながら、独り、花屋の女将はつぶやいた。

赤獅子と呼ばれる軍神、王太子、元傭兵の護衛、双子の片割れの神父、王都一の癒し手、司祭様、そして現市長の息子、みんな一束ずつ買って行った。

「さてさて、誰に軍配が上がるやら。」

## 前編（後書き）

きつと、沢山の花を贈るとルティアは、突っ返すのだろう。なので、一束づつなのです。

。以前、一度カミュール家が、花だらけになった経緯があるため・・・

## 後編

ルティアは、兄の手によって、カミュール家の自室へと戻されていた。

「ねえ、アンジユ。もう、私、命を狙われる危険はないのでしょうか？  
どうしてお兄様はあんなに、お怒りになるの？」

黒い髪、青い瞳の女神は、首を傾けて自らの侍女に問うた。

「ルティア様、私の留守に、危険です。王都は、街は危険なんですよ！！」

せめて私か、護衛のビオンを連れてくださるようには、何度も申し上げているでしょう？」

「だって、ビオンは休暇中だし、アンジユは用事で出ていたでしょう。」

「ちょっと、教会に行くだけなのに。」

あれだけ、兄にも侍女にも怒られているのに反省していない。きつ、と怒った表情をした侍女に対して、あわててルティアは言った。

「あの、でも、ごめんなさい。心配かけたことは、反省しています。」

揺れる青い瞳。うつむいて翳る、美しい横顔。それは、主人至上主義のアンジユを慌てさせるには、十分な威力を持っていた。

「あああ、ル、ルティア様。次からでいいのです。決して、独りで危険なことをなされませんようにいい。」

「そうだよ、ルティア。」  
優しい声が、後ろから聞こえて、ルティアは振り返る。

「お兄様。」

「私に心配をかけさせないでおくれ。お姫さま。  
私には、ルティアしか居ないのだから。」

この世で二人だけの兄妹、唯一の肉親であるルティア。それを失っては、生きていけないと、いつも言っているではないか。と、ルティアを抱き上げる。

「お兄、さま。」

そんな兄を、自分を溺愛する兄の頭をぎゅっと、ルティアは抱きしめた。

この心配は本物。私は、お兄さまを一人にはできない。  
ルティアは、自らの行いを反省した。

「あつ、あのう、ルティア様はご在宅でございましたでしょうか？ぼ、ぼく、わつ私は、しゅべるつ・・・。」

「シユベルツ・イル・マセルティ様、大変、申し訳ないのですが、ルティアお嬢様は体調を崩されて伏せ入っておりますので、お会いに成れません。」

そのころ、カミュール家のベルを鳴らした現市長の息子は、ルティアの兄・ラディシルに命じられるまま、執事に追い返されていた。

赤獅子と呼ばれる軍神、王太子、休暇中の元傭兵の護衛、双子の片割れの神父、王都一の癒し手、司祭様、そして現市長の息子、これで執事が追い返したのは7人目であった。そして、みんな一束ずつ白木蓮の花束を、置いていったのだった。

翌日のこと。

「なんだか、今日は木蓮の花が、たくさん生けてあるのね。」  
部屋中の花瓶には、どこも白木蓮が生けられている。ルティアの一番好きな花であり、うれしいのだが、未だかつてこのように沢山生けられたことはない。

「時期だからでございますよう。ルティア様。」  
さらっと、そう言う侍女も共犯者であった。

「木蓮を見ると、お父様を思い出すわ。」

そう言った、ルティアをぎよっとした顔で見る、侍女アンジュ。しかし、心配するまでもなく、ルティアは穏やかに木蓮の匂いを楽しんでいる。

ああ、よかった。ルティアの表情は、穏やかだ。

「あつ、あの、ルティア様はご在宅でございますようか？わっ私は、しゅべるつ……。」

「シユベルツ・イル・マセルティ様。今日はどういったご用件でございますしょうか。」

カミュール家を訪ねたシュベルツを、昨日と同じように執事が対応した。

ルティアの忘れ物である、日傘と籠と届けながら、花を贈ろうと思っていたのだが、昨日はすっかり舞い上がってしまった、花だけしか届けられなかったのであった。あのあと、子供たちが気を利かせて、シュベルツの屋敷まで日傘と籠を届けてくれたのだ。シュベルツが花と一緒に、届けたほうが良いだろうと。

なんと、できた子供たちだろう。拙い字でそれぞれ書いた、お礼の手紙も付いている。これを見たら、きつと、女神様の体調もよくなるだろうと、シュベルツは思った。そして、また木蓮の花束を買って日傘と籠と子供たちの手紙を持って、来たというわけである。

「かしこまりました。少々お待ちくださいませ。マセルテイ様」  
執事が、頭を下げた。昨日は、カミュール家当主、ラディシルの命により訪問客は全て退けたが、本日はなにも主人より仰せつかっていない。

「あつ、いいんです。ルティア様に渡していただければ。あの、体調が、……。」

「まあ、シュベルツ様。  
ごきげんよう、シュベルツ様。昨日は大変、失礼いたしました。」  
「ちょうど、庭に出ようとしたルティアが、踊り場へと顔を出し、訪問したシュベルツと鉢合わせたのだった。」

「るっ、るていあさま、ごきげんよろしく。ほんじつも、うるわしく、ぞんじあげます。」

「ルティアお嬢様、マセルテイ様は、昨日お嬢様がお忘れになった日傘と籠をお届けになったださったのです。お嬢様がお好きな木蓮のお花もいたいております。」

執事が、シュベルツを代弁して訪問の趣旨を話してくれた。

「まあ、そうですね？ありがとうございます、シュベルツ様。」

白いドレスに身を包んだルティアが、満面の笑みでシュベルツに微笑みかけた。青い瞳がシュベルツへと向けられる。その威力は、破壊的であった。

感極まったシュベルツは、倒れそうになったが、そこは気合で持ち直した。が、それがいけなかった。

「あつ、あのシュベルツ様、鼻から血が……。大丈夫でございませるか？」

どうしましょう。どうしましょう。と、慌てふためくルティアであったが、そこは、熟練の執事。そつとルティアにハンカチを差し出した。

「そうよね、拭かなきゃ。ありがとう。」

執事に、お礼を言うと、ルティアはシュベルツの鼻血をハンカチで拭こうとした。が、顔を真っ赤にして、鼻と口元を押さえているシュベルツは、そんなことに耐えられる免疫は皆無に等しかった。

ルティアが鼻血を拭こうと一歩進むと、シュベルツも一歩二歩後退した。

そして、また緊張と、歓喜と羞恥のあまり足のもつれたシュベルツ

は、後ろへ転倒して、頭を打ち、意識を失った。

ごっつ。

「大丈夫ですかっつ？」

お医者様を。どうしましょう。アンジユ。アンジユ来てー！」

「シュベルツ様？シュベルツ様！！」

シュベルツ・イル・マセルティ。王都エル・セル・ラルトの現市長の息子。

くすんだ金髪と茶色い瞳。いまひとつ冴えない青年。それなりに、誠実で優秀だが、ルティアを女神としてあがめている。そのため、ルティアに会うと、緊張のため、話し方と行動が挙動不審になる。

シュベルツは、今日も、今日とて幸せだった。

例え、木蓮の花の匂いに包まれて、気を失ったとしても・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5272o/>

---

僕と女神と木蓮と

2010年10月26日21時02分発行